つて、庶民階級が自から働きかけて收め得た結果ではないのである。

庶民擡頭の黎明期

それは兎も角、この庶民階級の國家社會の機構への進出は、實に史上における中世期と近世期とを分つべき顯著なる事象と認めて差支ない。しかし隋の時代に一旦かゝる途が開かれたからというて、こゝに從來の國家社會の組織が忽ちにして一變して、庶民飛躍の時代を現出したのではない。人材擧用の爲に科擧の制度が建てられても、無論官吏の總べてが科擧の出身に限られた譯ではなく、また門閥尊重の觀念が俄かにこれが爲に消滅する筈もない。ただ名門貴族でなければ國家社會の上に立つて地位を得ることができなかつたのが、この後庶民でもその位置に上り得ることになつたといふに過ぎない。

從つてこの庶民進出の途の開かれたことは、極めて重要なる意義を有すると共に、なほ單に國家社會の組織の變革の上における黎明の鐘たるに外ならない。しからばこの黎明の幕が捲き揚げられて、いよ〳〵いはゆる近世期の光景の演出されたのは何時からのことと認むべきであらうか。

安史の亂と社會の變革

唐の玄宗の天寶の末以來八年間に亙る安史の大亂は例へば張り切つた腫物に切開の刀をあてたものともいひ得られよう。凡そ病熱の爲に動かされてゐた働きが忽然として熄んだと共に、こゝに衰へた病體に負はされた瘡痍の爲